
約束

ハル

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束

【Nコード】

N1418Y

【作者名】

ハル

【あらすじ】

巧海と美咲の恋の物語。

2人の絆はメールのやりとりと電話だった。

ちょっとリアルな恋愛ストーリーです。

クライマックスをお楽しみに

出会い

オレはケータイを見ていた。

《おはよう。今日もお仕事頑張つてねー。タクちゃん大好きだよ。》

いつも決まった時間に美咲からメールが届く。

美咲はオレの彼女で5歳下の二十歳の大学生。オレ（巧海）は高校卒業してすぐに仕事に着き、今は仕事を覚えて早く一人前になる事を目標にしている。

《おはよう。行ってくる。美咲も勉強サボらず頑張れよ。》

オレはたまにしか返信しなかった。けど美咲は暇があれば、つまらないことでもいちいちメールを送ってきた。そしていつも最後には大好きだよ。と書いてあった。

美咲とは友達で紹介で出会った。

初めて会った時、美咲は花柄のシャツにショートパンツをはいていた。笑顔が可愛く仕草がとても幼かった。とても二十歳には見えない可愛い女の子だった。

出会ったばかりの頃、オレはそれ程彼女が欲しいとは思っていなかった。作ろうと思えばすぐに作れる自信があつたし、今は仕事が楽しくて仕方なかった。

しかし美咲はどうしても彼氏が欲しかったらしく、突然オレにこんな事を言ってきた。

『巧海君、お願い！！美咲の彼氏になって！！』

突然の言葉にびつくりした。

オレは簡単な気持ちで付き合いなくなかつたし、正直、女に振り回されるのが面倒臭かつた。

『ごめん…。友達じゃあダメかなあ。』

オレは悩んでやんわり断つた。そして美咲は何でそんなに彼氏が欲しいのか分からなかつた。

しかし美咲は何度もオレにお願いをしてきた。

『お願いー！！！！』

何度もこの会話が続いた。

そして、ついに…

『じゃあ…１ヶ月だけ…１ヶ月だけ美咲と付き合つて。いい彼女で

いるから！巧海君の邪魔はしない。1ヶ月したらちゃんといなくなるから。お願いー！！」

美咲は必死でお願いをしてきた。さすがに断り続けるのも可哀想になり、9月いっぱい1ヶ月だけという約束で付き合う事になった。

美咲はオレと会った時からやたらと、カッコ良いだの、優しいだの、ステキだのを連発していた。半分、冗談だと思っていたが嫌な気分にはならなかった。女の作戦か？…とも思った。

こんな感じで2人はスタートをした。

付き合った日から美咲からは毎日メールが来た。そして夜には電話がかかって来た。

『こんばんはー！！ねえーねえー、巧海君って言い難いから…タクちゃんって呼んでも良い??』

最初の電話って感じのトークで話しかけて来た。

『好きに呼んでくれてイイよ。』

年下の子と付き合うなんて初めてだったから会話が恥ずかしかった。

『ありがとうータクちゃん！！美咲の事は美咲って呼んでいいから。』

『おう。』

電話も少し苦手だったから、オレは会話と言うよりはほとんど返事しかしていなかった。美咲は今日の出来事や昔の話などを散々している。とても楽しく時間があつという間に過ぎた。

1時間ぐらい話しただろうか。

オレはだんだん眠くなってきたしまった。オレの返事が少し遅れだし、美咲に眠いのがバレた。

『ゴメンねー。眠いよね？明日もお仕事頑張つてね！おやすみっ』

『うん。ありがとう。美咲もゆっくり寝ろよ。おやすみ。』

オレは電話を切つてすぐに寝た。

2日目

そして次の日の朝、メールが届いた。

《おはようー。昨日はありがとう！タクちゃんの声を聞いたら元気が出る。タクちゃん、お仕事頑張ってね！大好きだよ。》

彼女からって感じのメールにちよつと嬉しくなった。

《おはよう。頑張ってくる。美咲も勉強頑張れよ。》

普段はほとんど返信しないが、送ってみた。何だか恥ずかしかった。でも仕事を頑張ろうって気分になれた。

仕事中も何通かメールが届いてた。

休憩の時に見たがウキウキした内容のメールで、見てるとアホらしくて笑ってしまった。そして仕事が終わる頃にもメールが届いた。

《お仕事お疲れ様ー。よく頑張ったね。エライっ。お家に帰ってゆっくり休んでねー。タクちゃんすきー。》

…全然偉くないし。そう思いながらも美咲から来るメールはいつも明るくて元気になれた。そして自然と笑顔になっていた。

また夜になって電話がかかって来た。

『こんばんはー！！何してるの？』

美咲の声は元気が良くて可愛かった。

『別に。何もしてないよ。』

オレは仕事に疲れてソファーでのんびりしながらテレビを見ていた。

『ねえーねえー、4日の日曜日って空いてる？明後日なんだけど…』

彼氏が出来て嬉しいのか、美咲は早速デートに誘って来た。

『特に用事はないかな。』

『じゃあ、美咲とデートしよっ！』

可愛い声で言ってきた。

『おう。別にいいけど。どこか行きたい所でもあるの？』

『行きたい所はいっぱいあるよー！！』

電話の向こうで子どもみたいに美咲はしゃいでいる。

『じゃあ、明日までに決めといて。』

『うん！また明日電話かけるね！』

嬉しそうにそう言つと美咲は電話を切つた。

…そんなにオレと付き合えて嬉しいのだろうか…

ふと思つた。でも美咲と付き合つて2日。オレも何だか少し変わった様な気がした。

ケータイを見ながらニヤニヤしてるオレがいる。気が付くとケータイを手にしてるオレがいる。いつもならほとんど返さないのに不器用にケータイを打っているオレがいる…

そんな事を感じながら気が付くとソファで寝ていた。

3日目

朝になりオレはいつもの様に仕事の準備をしている。朝はいつもギリギリに起きるから急いで支度をして家を飛び出る。会社までは車で10分程度。仕事が始まる20分前には着いていたい所だが、今日も10分前：

会社に着いた頃、美咲からメールが来た。

《おはようー。タクちゃん！行きたい所決めたよー。最初のデートはちょっと遠くまでドライブに行きたい！！運転してるカッコ良いタクちゃんが見たいなあー。今日もお仕事頑張ってね。タクちゃん大好きだよーん。》

絵文字がいつぱいのメールは女の子らしくとても可愛かった。彼女を作るって良いもんだな！しばらく彼女がいないオレには新鮮だった。

《おはよう。わかった。また詳しく夜の電話で聞いわ。仕事行ってくる。》

ギリギリに職場に着いたから短い言葉で返信した。美咲からすぐにまたメールが届いた。

《タクちゃんだあ。メール返してくれてありがとう！えっ？！夜もまた電話してイイのー？タクちゃんのカッコ良い声が聞けるっ！ありがとぅー！！美咲、これで今日も1日頑張れるよ！！タクちゃん大好きっ》

読んでいると、仕事のチャイムがなり仕事が始まった。

オレも美咲からのメールで仕事を頑張る気持ちになった。

3日前と違うのは…休憩時間の過ごし方。オレはご飯を食べながらケータイを突いている。いつもならさっさと食べて寝ているが、今はメールを読んだり気が向けば返信したりしている。たいした内容ではないが、美咲からのメールは嬉しかった。ケータイの中には明るい美咲がいた。

夜になり電話がかかってきた。

ケータイはピンクに光っていた。

美咲だ！

オレは美咲からの電話やメールがわかる様に美咲だけ着信の色を変えた。サブディスプレイも美咲と表示されている。電話を取った。

『こんばんはー！！』

美咲の明るい声がした。

『おう。美咲はいつも元気だねえ。』

最初よりも少し楽に話しが出来た。

『うん。だってタクちゃんから夜電話してもイイって言うてくれたからー！嬉しいの。』

美咲はちよつと高めの声で、とても可愛いしゃべり方をする。

『そっか。美咲は単純だな。で、どこに行くか決めた？』
いつもの様にソファーに転がりながら言った。

『うん。でもね、美咲、行きたい所がいっぱいあり過ぎて困るー』

『ははは…どこに行きたいん？』

美咲の頭の中はデートの事で頭がいっぱいの様だった。

『ん〜とねえ、遊園地も行きたいし、動物園も行きたいし、水族館も行きたい！！後は…』

『美咲は子どもみたいだな。全部子どもが行きたいって言う場所ばかりじゃん。』

二十歳の子が行きたいデートはそう言う所なのだろうか。ふと思った。

オレは外に出るデートはあまりした事がなかった。

今までのデートと言えば…ご飯を食べに行ったり買い物に付き合ったりしたが、ほとんどはオレの家でゴロゴロしながらDVDを観て過ごしていた。

『え〜？そんな事ないよぉー。カップルも多いしデートスポットじゃん！！』

美咲がブーブー言いながら言い返してきた。

『そつか。わかった！できる限り一緒に行こう？オレも今月の休みはなるべく予定入れずに空けておくから。』

はしゃいでいる美咲の声を聞いていると、オレも楽しくなって全部の場所を連れて行ってやりたくなった。そんなに喜ぶなら、どこだって連れて行ってやろうと思った。美咲の彼氏でいるのは今月だけだし美咲の事もっと知りたくなった。

『…うん…ありがとう…でも…1ヶ月じゃ…行けないかあ…』

美咲は忘れていた約束を思い出したかの様に声のトーンが下がった。さっきまでワイワイ話しをしていたのに急に美咲が落ち込んで、時々会話には静かな間があいた。

『ゴメン…でも、約束だったし…。今は美咲の彼氏なんだから明日は楽しもう??』

…本当の事を言っただけなのに、いけなかったのだろうか…オレには女の子の気持ちがよく分からなかった。
美咲は本気で落ち込んでいる様だった。

でもしばらくすると電話からはまた明るい声が聞こえた。

『うん…』

そうだね！！まだ始まったばかりだし、まだまだ先は長いしー！！』

またいつもの美咲に戻った。

いや、無理に明るく振舞っていたのかもしれない。

『で、明日はどうするの？水族館でも行ってみる？ちょっと離れるからドライブにもなるし。』

オレは美咲が言っていたプランの中から選んだ。

『うん。あー明日が楽しみ過ぎて寝れるかなあー。起きたらカッコ良いタクちゃんに会えるー。幸せー。』

また美咲ははしゃいでいた。

『明日は朝から出るぞ。9時に家の近くのコンビニまで迎えに行くから。ちゃんと寝ろよ。』

『はあい！！タクちゃんもねっ！！おやすみー』

電話を切った。

オレは電話でみせた美咲の寂しそうな声が気になった。本当に嫌だったのだろ。もう約束の事はあまり触れないでおこうと思った。

美咲とは会った日しか会っていないから、明日で会うのは2回目。オレも美咲に会うのが楽しみだった。

オレはすっかり美咲のペースにのまれていた。

遅刻したらいけないとアラームをかけて寝た。

初デート

朝になりケータイがなった。

…もう起きる時間か？…そう思いケータイを取った。

昨日かけたアラームではなく美咲からのメールだった。

《タクちゃんおはようー。朝だよ！起きてー！今日は初デートだね！！楽しみっ！9時にコンビニで待ってるね！》

朝からハイテンションのメールが届いた。オレはアラームをかけた時間まで二度寝をしようか迷ったが、ギリギリになってはいけなと支度をする事にした。

デートかあ…着て行く服も少し考えた。でも、結局Ｔシャツにデニムを合わせたいつもの格好になった。

まだ暑いかな…9月に入ったばかりで外ではセミがうるさく鳴いていた。

支度が終わり早めに家を出て車を走らせた。最近誰もこの車に乗せていなかったから、車内は少し散らかっている。いろいろな荷物を後部座席に投げ込んだ。とりあえず助手席は大丈夫だ。

ちょっと早めにコンビニに着いた。

ふとコンビニの中をみると美咲らしき人がいた。一度しか会ってい

ないからなんとなくしか覚えていない。
向こうも気付いたのか、こっちに向かって歩いてくる。

『おはようー。タクちゃん！！今日はよろしくお願いしますっ！』

やっぱり美咲だった。

今日スカート姿で可愛かった。美咲は車に乗って、持っていたカバンを膝の上に置きシートベルトをしめた。そしてコンビニで買ってくれていたジュースを渡してくれた。

『迎えに来てくれてありがとう！』

近くにいる美咲に少しドキツとした。

水族館までは車で片道2時間ぐらいの所を選んだ。ドライブに行きたがっていた美咲の要望に応えた。

車の中でも美咲は元気いっぱいいろんな話をした。会話はどんどん盛り上がり楽しかった。話しの中で美咲は結構ドジだという事が分かった。笑える話がいっぱいあった。

2時間のドライブも美咲と一緒にだとなつという間に経ち、すぐに目的地に着いた。

ここの水族館はまあまあ大きくて、色んなショーがしていると有名だった。

水族館の入場口はお客さんの数は少なかったが、中に入ると意外と多くてびっくりした。日曜日だし人が多いのは覚悟していた。家族

連れ也多かったがカップルも目立っていた。

中に入ってすぐの所に大きな水槽が見えた。

美咲は水槽の中の魚を見つけると一直線に歩いて行き、『タクちゃん、これスゴイよー！』と言いながら喜んでいた。勝手に進んで行く美咲を見て、迷子になるといけないと思いオレは美咲の手をギュッと握った。

美咲は驚きながらこっちを振り返った。びっくりした顔の美咲はすぐ笑顔になり『ありがとうー！嬉しい。』と繋いだ手を見た。

美咲に初めて触れた瞬間だった。

その後も2人は手を繋ぎながら館内を歩き色んな魚を見た。美咲はデジカメで写真を撮ったりワイワイはしゃいでいたが繋いだ手は離さなかった。

この水族館の目玉であるシヨーは、あまりの人の多さに見る事が出来そうになかった。しかし美咲は人が多くて全く見えないシヨーの会場から出ようとしない。

『シヨーは残念だったな。こんなに多かつたら見れないよ。また今度来ればイイじゃん。』

オレはそう言って繋いでいる手を引いた。すると突然、美咲がオレの手から離れた。下を向いて悲しそうにしている。

『嫌…』

子どもがタダをこねるみたいに美咲が言った。

『今度つて…』

美咲達には今度は無いもん！！

今見なきゃ…次は無いもん…』

泣きそうな顔でこっちを見た。

オレはそんなつもりで言ったんじゃない。何も考えずに言った事を反省した。

オレはふと横をみるとお土産売り場が目に入って来た。

『ゴメン…』

やっぱり…こんだけ人が多かつたらショーは見れないかなあ…

でもショーは見れないけど、ここに来た記念にぬいぐるみでもお土産に買って帰るかあ！？ペアでもいいよ！！』

また美咲の手を取り、繋ぎ直した。

悲しそうな顔をしていた美咲はチラッとショーの方を見て諦めたのか、またオレの方を向いて笑顔になった。

『うん！！ぬいぐるみ買いに行くー！！』

元気な美咲に戻った。

そっか…この恋は1ヶ月の約束だもんな…
今度は…無い…かあ…

美咲の言葉が頭から離れなかった。

お土産売り場に行くと美咲はどのぬいぐるみにしようか散々迷っていた。何個もぬいぐるみを手に取っては戻しての繰り返しだった。そんな美咲を見ていると可愛くて仕方がなかった。

結局、ショーが見れなかったイルカのぬいぐるみに決めていた。なぜそれに決めたか聞くと、“幸せになれるイルカ”というキャッチフレーズを見て選んだと言う。

オレはイルカのぬいぐるみを2つ手に取ってレジに並んだ。お土産売り場も少し混んでいた。美咲はレジの横にあるキーホルダーを見ている。レジ待ちの間、オレは後ろにもいっぱい人が並んできたから、先に美咲を店の外に出してゆったりしたスペースで待つように言った。

少し待ち順番が来ると、さっき美咲が見てたキーホルダーも一緒に入れてもらった。美咲の喜ぶ顔想像出来た。

会計はすぐに終わり、オレは急いで美咲の所に行った。

水族館は広くて結構歩いた。

お昼も過ぎお腹も空いてきたから、併設しているレストランで昼ご飯を食べる事にした。

メニューを見て、美咲はすぐに決めた。オレは優柔不断でなかなか決めれないから美咲が2番目に食べたい物を選んでもらってそれを注文した。

料理が運ばれてくると、美咲の皿の上には魚のフライ。そしてオレの皿の上にはエビフライが乗っていた。さっきまで元気に泳ぎまくっていた魚達のが衣にくるまれて出てきた。

オレは美咲と目が合うと笑ってしまった。

『何でこれにしたの？こいつら、さっき見たよね？？』

笑ながら言った。

『だって、メニューの中で1番食べたかったから！！』

美咲も笑ながら応えた。

流石、美咲だな。と思いながら料理を口に運んだ。料理はとても美味しかった。目の前には笑顔で口いっぱい頬張っている美咲がいる。きつと美咲と一緒にだから美味しいんだろっなあと思った。

帰りは少し遠回りをして帰った。帰りの車の中も美咲は元気にいっぱい、今度のデートプランを考えていた。

『来週は、動物園行きたい！！美咲、動物触れんけど！！！！』

『動物嫌いな？』

『うん…ちょっと苦手ー』

そんな会話をしながら来週のデートプランが決まった。美咲は何で

あまり好きでもない動物園に行きたがるのか分からなかった。

美咲は実家に住んでいるから、早めに帰らないといけない。そう言う所はやっぱり子どもで可愛かった。

20時頃、朝迎えに行ったコンビニまで帰ってきた。隅の方に車を止め、もう少しだけ美咲と話をした。今日はずっと一緒にいたのに、まだそばにいたかった。

オレは今日買ったぬいぐるみを思い出し、美咲に渡した。美咲はすぐに袋から開けると嬉しそうに手に取っていた。そして底のほうから小さいキーホルダーを見つけるとびっくりした顔でオレを見て、今日1番の笑顔で喜んでいた。

美咲の笑顔は本当に可愛い。

『タクちゃん。今日は本当にありがとう！！めっちゃ楽しかったよー！！カッコ良いタクちゃんとデートが出来て、美咲は幸せだなあー！！来週も楽しもうねっ！！』
車から出ようとした時に、振り返って美咲が言った。

『オレも楽しかったよ。ありがとう。』
素直な気持ち伝えた。

『タクちゃん…』
美咲とタクちゃんって今はカップルだよねえ？だったら…帰る前にちょっとだけ…キスしてもイイ？』

美咲はいつも突然言ってくる。ちょっと照れているようだった。

『うん…』

オレはそう言っていると美咲をそっと引き寄せキスをした。美咲の唇はとても柔らかかった。目をつむると、一瞬時間が止まったような気がした。

そしてまた目を開けると、目の前には可愛い美咲がいてとても嬉しそうにこっちを見ていた。

『ありがとうー！タクちゃん大好きだよ！じゃあ、美咲は帰るね！バイバーイ』

美咲は笑顔で車から降りた。何度も振り返りながら美咲は家に帰って行った。

オレは美咲の後ろ姿が見えなくなるのを確認して、自宅へ車を走らせた。

家に着くといつものようにソファでゴロゴロした。するとケータイが鳴り美咲からメールが届いた。

《タクちゃんー！今日は運転お疲れ様です。明日からまたお仕事だねえー。頑張れる？？今日は早く寝て疲れを取ってね！今日は本当にありがとうー！！おやすみっ》

オレは返信しようと思っていたが、疲れてそのまま寝てしまった。

5月10日

月曜日が始まり、朝が来た。

またいつものように朝からバタバタとして仕事に向かった。今日は美咲にメールを送ろうと早めに家を出た。美咲はオレが早めに出た事が分かったかの様に、会社に着くのと同時ぐらいにメールが来た。

《タクちゃんおはよう！昨日は楽しかったから今週一週間めんどくさい学校頑張れそうだよー！！（笑）タクちゃんもお仕事頑張つてね！いつてらっしゃい。タクちゃん大好きだよー！！》

昨日の笑った美咲が思い出された。

《おはよう。美咲は疲れなかった？昨日はメール返さなくてゴメンな。気が付いたら寝てしまった。仕事がんばってくるよ。美咲もちゃんと勉強しろよ。》

車の中で返信した。

仕事は楽しかったが、今はもう一つ楽しみが増えた。あれほど女には興味がなかったオレが、美咲と出会って変わった感じがした。

さっきメールを送ったかと思うと、またケータイが鳴った。ピンク色に光っている。

《はい！勉強頑張る！！今週も日曜日が楽しみだねっ！！》

美咲は返信が早かった。

オレは小さな工場に務めているのだが、今の時期は忙しくて休みが日曜日しかない。今月は祝日があるが、どうも休めるか微妙な感じだった。美咲にはあまり期待をさせたら可哀想だから、祝日が休みかも知れない事は言わなかった。

《オレも楽しみ。他にも行きたい所があつたら考えといてな。》

そう返信すると、オレは仕事に行つた。

今日もたくさん美咲からメールが届いた。教授の詰まらなかったという講義の話しや友達の話の話し、家での話しや、美咲のドジした話など……暇があればメールをしてきた。オレのケータイフォルダは美咲でいっぱいになってきた。オレはそれを読むのが楽しかった。

そして仕事から帰ると、“おかえり”というメールが届いた。

寝る前になると美咲から電話が掛かり、美咲の元気な声を聞いて寝た。

こんなメールと電話のやり取りが土曜日まで続いた。

土曜日の朝

《タクちゃんおはようー！！やっと明日はカッコ良いタクちゃんとデートの日だよー。楽しみー！！ラスト1日お仕事頑張ってね！タクちゃん大好きだよー！！》

いつもの様に美咲からメールが届いた。オレはそれを見てから仕事に行くのが日課となっていた。美咲のメールは元気がでてる。美咲と出会ってから1日があつという間に過ぎて行った。とても楽しくて毎日が充実していた。

職場では先輩から“最近お前変わったな”。女でも出来たのか？”と冷やかされる。

美咲と出会って10日。まだ10日しかたっていないというのに、オレは10日前と比べ物にならないくらい幸せだった。仕事もミス無く順調にこなせた。

夜になり、オレはまた美咲と電話をしている。

『明日は動物園デート！楽しみだなあー！！』

美咲は電話の向こうではしゃいでいた。相当楽しみにしていたのだろう。

『で、動物園以外でも行きたい所は見つかった？』

オレは美咲の行きたい場所を聞いてみた。

近くの動物園はそれ程大きくない為、すぐに見終わってしまう。

『んー。買い物行きたいかなあ。服見たい！！タクちゃん好みに美咲を变身させて欲しいなあー！！』

『分かった。でも変身しなくても今の美咲は可愛いよ。』

ちよつとオレらしくないクサイ台詞を言ってみた。

『本当ー??ありがとう。嬉しい!!でも、タクちゃんカッコ良いの、美咲は子どもっぽいから…タクちゃんに釣り合っていない…美咲ね、タクちゃんの事が好きだからもっと可愛くなりたいたい…!』

聞いていると恥ずかしかった。

美咲はオレの事をどう思っているんだろう…美咲の中でオレは相当カッコ良くなっている様だった。

しかし、そう思ってくれているのは嬉しかった。

『ははは…分かったよ。ありがとう。じゃあ、明日は買い物も行くな。また朝9時にコンビニに迎えに行くから!ゆっくり寝ろよ。おやすみ。』

またあのコンビニで待ち合わせをして電話を切った。

デート

朝になりケータイの鳴る音で目が覚めた。今日はアラームをしなくても美咲が起こしてくれると言ったので美咲のモーニングコールで目覚めた。

朝から美咲の声が聞けて笑顔になれた。

オレの支度はすぐに終わり、家を出た。

動物園に行くのは何年振りだろうか…
車の中で動物園までのナビをセットした。そして車を待ち合わせのコンビニに向かって走らせた。

少し早めに着いたが、美咲の方が先にコンビニにいた。美咲はオレの車を見つけると手を振って近づいてきた。

『おはよう。ちょっとでも早くタクちゃんに会いたかったから、早めに家を出ちゃった！！』

そう言いながら車に乗ってきた。今日の美咲も可愛かった。
そして、またジュースを2つ持っていた。

『今日のデートも楽しみだねえ！！はい。今日は美咲と一緒にジュース。お揃いだよー』

オレに渡してくれた。

『ジューズお揃いかあ。ありがとう！オレがオレンジジューズ好きなん知っとったん？』

美咲がくれたジューズはオレの好きなオレンジジューズだった。

『本当？知らなかったー。美咲も好きだったから選んだんだけど、たった今もつと好きになったー！』

美咲は笑っていた。

動物園までは1時間かからないぐらいの距離だった。車の中で美咲はオレにたくさん質問をしてきた。その中で今までの彼女の事も聞いてきた。オレは美咲の過去なんて気にならないが、女は気にするのだろうか。美咲は最後に一言『美咲がタクちゃんの1番の彼女になりたいな』と言った。その言い方がとても可愛かった。

いろいろ話しているうちに動物園に着いた。

今日は車を降りた所から美咲と手を繋いだ。美咲は嬉しそうに微笑みながらオレの手を握っていた。

園内はそれほど多くの人は来ていなかった。入るとすぐにキリンがいた。隣にはゾウもいて餌を食べていた。動物園の主演達が出迎えてくれている。

少し歩くとサルがたくさんいる檻があった。オレと美咲が檻の側を通るとサルが暴れ出し、大きな音をたてながら柵から柵へと飛び移った。

美咲はびっくりしてオレの手を強く握った。

『うわぁ！…怖い…。』

本当に怖がっていた。動物嫌いって言うてたっけ…オレは思い出した。

『大丈夫だよ。檻から出て来ないから。』

オレは笑ながら言った。

『うん…。』

やっぱり美咲はビビっていた。

また少し歩くと今度は鳥がたくさんいた。入り口でオウムが『コンニチハ。コンニチハ。』と喋っていた。鳥は怖くなかったのか、美咲は『面白いー！』と喜んでいた。ふれあい広場もあってウサギやモルモットが触れたが、美咲は首を横に振っていたので見るだけで通り過ぎた。その後もペンギンやカワウソ、ヤギや羊、クマやバクなどたくさん動物を見て歩いた。可愛い動物は美咲も笑顔で見えていた。美咲は動物園でもデジカメで写真を撮りっぱい撮っていた。

そして最後にライオンとトラがいる所に行った。トラは寝ていてほとんど動かなかったが、ライオンはグルグルと檻の中を歩いていた。ライオンがこっちを向く度、美咲は固まり驚いていた。

『大丈夫だよ。』

怖がっている美咲を抱き寄せた。

『うん…ありがとう！…！』

美咲はオレの方を見てまた笑った。
美咲の笑顔がオレは好きだった。

動物園はそれ程大きくないから1時間もしないうちに全て見終わった。最初の場所に帰ると美咲がソフトクリームが食べたいと言ったからソフトクリームを買ってベンチに座った。美味しそうにソフトクリームを食べてる美咲はやっぱり幼くて可愛かった。

『美咲は動物が好きじゃないのに何で動物園に行きたかったん？』

オレは聞いてみた。

園内では楽しそうにはしゃいでいたが、怖そうにもしていたし本当は楽しめなかったんじゃないかと思った。

『ん…動物はそれ程好きじゃなかったけど、タクちゃんと来てみたかったの！だつてずっと手を繋いでいれるし、怖くてもタクちゃんが側にいてくれるから大丈夫だったもん！幸せだったよ。ありがとう！…！』

美咲は笑顔でそう言うと、またソフトクリームを食べ始めた。美咲はオレと一緒にいたらどこでも良かった。オレと一緒にいたかったんだと思った。

動物園を後にすると、今度はショッピングセンターに向かって車を走らせた。

どんな服を買おうか美咲は考えながら、オレにも好みを聞いてきた。…特別、オレ好みにしなくても今のままで充分なのに…そう思った

が、美咲は一緒に行く買い物をすごく楽しみにしていた。

ショッピングセンターに着くと、丁度お昼になり先にご飯を食べる事にした。日曜日だからこの店もいっぱい、結局空いていたのが回転寿司だったからそこにした。

お腹もいっぱいになって、美咲の服を探した。オレは車の中で『スカートが似合うと思うよ。』と言ったから美咲はスカートを見ていた。何件か見たが美咲の気に入った服が無かったのか、美咲は何も買わず店から出てきた。

『良いのが無かったのか？別にオレが言ったスカートじゃなくても、美咲が欲しいと思った服を買えばいいんで？』

美咲に言った。

『ううん…気に入ったのが無かったから今日はやめておく…』

少し落ち込んでいたようだった。

元気の無い美咲の手を繋いで歩いていると、アクセサリー屋さんが目に入ってきた。

『じゃあ、またお揃いの物でも買うか？美咲、オレとお揃い好きだろ？』

そう言って美咲をお店に連れて入った。お店の中はガラスケースに入ったアクセサリーがいっぱいあった。

アクセサリーを見ていると店員がやってきた。

『いらっしやいませ。よろしかったらお取りいたしますね。ぜひ付けてみてください。』

そう言う和美が見ていたリングを出してくれた。

『サイズはピッタリですね。彼女さんによく似合っていますよ！』

店員は何でも似合うと言うから当てにならない。けど、リングを付けた和美は可愛かった。

『ん…でも…やっぱりリングはいらないや！…ずっと一緒につけているものもいいから…あつ、ネックレスがイイかなあー！！そしてラクちゃんもお仕事の時も付けれるよね？』

和美は向こうにあったネックレスを指差した。

『そうだな。オレもネックレスならずっと付けていられる。仕事でも大丈夫だよ。』

そう言うてネックレスを見ることにした。和美はどれにしようか迷っていた。ネックレスも種類がいっぱいあつて、店員にいろいろ出してもらいながらリングの付いたネックレスに決めた。

これならオレでも付けれるって、和美が選んでくれた。和美にはちよつと男っぽいデザインだったが、和美はすごく気に入ったみたいで嬉しそうにしていた。

時間もたち、そろそろ帰らないと家に着くのが遅くなる時間になった。

車の中でさっそく美咲はネックレスを付けてはしゃいでいた。そして信号待ちで止まっていると、オレの分も出して、オレに付けてくれた。

『これですつとタクちゃんと一緒にいられるー。ありがとうー！タクちゃん大好きっ』

美咲がオレに抱きついてきた。

喜んで美咲を見ると、オレもすごく嬉しかたっし幸せだった。

今日もあつという間に過ぎて行き、もう美咲と別れる時間がきた。

今日も最後に美咲とキスをして別れた。

記念日

15日の木曜日。

朝早く美咲からメールが届いた。

《おはようー。まだ起きてない？早く起きてー！！遅刻するよ。今日はハーフ記念だよー。美咲達は1ヶ月しか付き合わないから記念日がないじゃん？だから今日が半月の記念日ー！！美咲と付き合ってくれてありがとうー！！今、美咲はとっても幸せだよ。タクちゃん大好きー！！！！》

…そっかぁ…記念日無いもんな…

美咲からのメールを見てちよっと切なくなった。

オレはだんだん約束なんてどうでも良くなった。もつと美咲の笑顔を見ていたいし、美咲と一緒にいたい。美咲といろんな所に行きたい。そう思った。美咲と一緒にいてオレはだんだん美咲の事を好きになっていった。

けど、美咲には今言わないでおこうと思った。1ヶ月経って、美咲がまだオレの事を好きでいてくれたらオレから告白して美咲を驚かせてやろうと思った。

《おう。おはよう。ちゃんと起きてるって！！ハーフ記念日かぁ。分かった。今日仕事が早く終わったらご飯でも食べに行くか？お祝いしよう。》

定時に終わらせて急いで帰って仕度をしたら18時には美咲を迎え

に行けると思った。

《やったあー！！楽しみにしてるね。でもお仕事が忙しかったらいいよ。ありがとう！！》

美咲からの優しいメールが届いた。

今日の仕事は忙しかったが何とか早めに終わらせる事が出来た。昼間にレストランの予約もした。

18時ギリギリになるだろうか…急いで帰って仕度をして、家を出た。

いつものコンビニに着くとやっぱり10分ほど遅刻をした。けど、

美咲はすごく嬉しそうな顔をして待っていてくれた。

『タクちゃんだあー！！！！平日にも会えるなんて幸せっ！！時間を作ってくれてありがとう。』

美咲の首にはオレとお揃いのネックレスが光っていた。

『ごめん。遅くなって。今日は大丈夫なん？』

『うん。大丈夫！友達とご飯食べてくるって言ったから！！』

美咲は親を上手く胡麻化して来たみたいだった。

車に乗ると予約をしたレストランに向かった。

レストランでは2人で簡単な記念日のコースを食べてお祝いをした。

美咲はいつもの笑顔ですつとオレを見ていた。いろんな話しもして会話が弾んだ。

『美咲ねー、本当は内緒なんだけど、タクちゃんにだけ秘密教えてあげる。聞きたい?』

『うん。何?』

美咲が突然言い出した。美咲が突然いう事はビックリする事だから、心の中で何を言うのかドキドキしていた。

『美咲ね…』

実は魔法が使えるの。でも人生の中でだった1回しか使えないの。』

美咲は変な事を言い出した。オレはドキドキして損をしたと思った。美咲は変わっていると思っていたけど、やっぱりちよつと子どもっぽかった。

『えっ? ははは…そっかぁ。で、何に使うの?』

ちよつとバカにして笑ったら、美咲はほっぺを膨らましていた。

『まだ使わないもん! ってか、本当だよ? 本当に魔法使えるもん!』

『分かった。分かった。誰も信じてないって言ってないじゃん! じゃあ…オレも内緒にしてたけど…』

オレも魔法使えるよ。美咲と一緒に1回だけ!』

オレはちよつと意地悪を言ってみた。

『嘘だあー！！タクちゃんは絶対使えないもん。魔法を使えるのは美咲だけだもん！』

美咲はムキになってそう言った。

『本当だよ。美咲だけが知ってるオレの秘密。美咲と一緒に。』

オレがそう言くと、美咲は笑っていた。美咲は“オレと一緒に”という言葉が好きな様だった。

そんな変な会話をしながら、食事を済ませ美咲をコンビニまで送った。

車の中で美咲は次のデートの話しをしてきた。

『ねえーねえー、今週も美咲とデートしてくれる？』

オレの腕を突つきながら言ってきた。

『うん。いいよ。予定は入れてないから。』

運転しながらオレは応えた。

『やったあー。どこ行こうかなあ？タクちゃん、どこに連れて行ってくれる？』

『美咲の好きな場所に連れて行ってやるよ。オレはどこでもイイよ。』

『ん…じゃあ、遊園地行きたい！思い切ってユニバ行く？』

美咲は目を輝かせながら言った。

『イイねえ。ユニバ！行った事ないから一緒に行くか。』

オレが返事をするとな美咲はすごく喜んでいた。

『でも3日後かあ…祝日も重なってるからきつと多いと思うよ！それにどうせ行くなら色々調べて行きたいし。ユニバは来週にしない？美咲も乗りたいものとか観たいものとか調べといて…！』

『うん…分かった…美咲、めっちゃ楽しみにしてるからっ…！！タクちゃんとユニバなんて夢みたいー！！』

美咲は、来週になった事はちょっと落ち込んでいたが、一緒にユニバに行けると嬉しがっていた。

車はいつものコンビニに着き、今週のデートはゆっくり考える事にして今日は別れる事にした。

時間も遅くなったので、すぐに美咲は帰っていった。

メール

次の日も朝からメールは届いた。

《おはようー！昨日はありがとう。行きたい所見つけたよー！！また夜にモシモシしようねっ！今日もお仕事行ってらっしゃい。タクちゃん大好きだよ！》

美咲からのメールを見てオレは仕事を始めた。

仕事中もケータイはピンクに光り、美咲からのメールがたくさん来た。半月過ぎた頃からちよつとずつ淋しそうなメールも届いた。あ
と何日：とか、もつとそばにいたいな：とか。

でも美咲は美咲から言い出した約束を守ろうと頑張つて、《最後は笑顔でお別れするもん》なんてバカなメールも送って来た。

夜になってオレはまた美咲と電話をした。毎日電話をしてるのに、毎日違う話をしてとても楽しかった。美咲の声を聞くとオレは落ち着いて、いつも元気をもらえた。

『そう言えば、デートで行きたい場所ってどこなん？』

『んー海行きたい！』

暑いって言うてももう夏は終わったのに、美咲は海に行きたいと言
い出した。

『何で?』

またドライブでも行きたいのかと思ってオレは聞いてみた。

『美咲のね、待ち受けが砂浜の写真になってるんだけど、キレイだからタクちゃんとも行きたいのっ!』

そう言えば美咲のディスプレイにはキレイな海が写っていたっけ…ふと思い出した。

『わかった。海かあ…そんなにキレイな海は無いかもしれんで? ちよつと遠いかも知れんけど、行ってみるか!』

オレは頭の中で、この辺りの海を浮かべて一番キレイな海に連れて行ってやろうと思った。

『やったあー!! 写真いっぱい撮ろつと!』

いつもの喜んでいる美咲がいた。

今日も1時間程話をして電話を切った。

《おはようー。明日はデート!!!! 楽しみだなあー!!!! タクちゃん

あと1日お仕事頑張つてね。大好きだよー!!」

また朝が始まった。そしてメールを見てオレは仕事についた。

来週は祝日があるせいか仕事が忙しかった。ほとんど休みなく働いて、気が付けば夕方になっていた。

今日は美咲からのメールがほとんど読めなかった。ケータイを取ってみると美咲からのメールが6件溜まっていた。

…こんなにメールを送ってくるなんて、美咲も暇だな…そんな事を思いながら、メールを読んだ。オレは美咲からのメールを見ると少し疲れが取れた気がした。

《ごめん。やっと仕事終わったわー。今日はさすがに疲れた! すぐ帰るからまた夜に電話しような。》

オレは今日初めてメールを送った。美咲はオレからメールが来ない事に、少し慣れてきているようだった。

《タクちゃん、お仕事お疲れ様!! 今日電話しなくてイイよ。いつも美咲と電話をしてくれてありがとう! ゆっくり休んで明日のデート楽しみにしてるねっ》

すぐに美咲から返信が来た。オレの事を気遣ってくれているメールが嬉しかった。

《ごめんな。ありがとう。じゃあ、9時に迎えに行くから! 明日もモーニングコールよろしく!》

《うん！！！美咲の声で起きてねっ。タクちゃん大好きだよ！》

こんなメールのやり取りをして俺は家に帰った。

ご飯を食べて風呂に入って、やっとゆっくり出来る時間が出来たが、
疲れていたせいかオレは横になった瞬間寝てしまった。

海

『タクちゃんおはようー！！朝だよー！！今日はデートだよー！！早く迎えに来てねっ！』

美咲から電話がかかってきた。

今日も朝から元気いっぱいだった。

『おはよう。わかった。すぐ支度して行くな！！』

美咲の声で起きたから目覚めが良かった。

オレは早めに支度を済ませ、待ち合わせ場所のコンビニに向かって車を走らせた。

…海かぁ、遠いけどあそこに行ってみるかぁ…
運転をしながら行き先を考えていた。

時間より早めに着いたが、美咲の方が先にいて、手を降りながらこっちに近づいて来た。

『おはよう！今日もよろしくお願いします。タクちゃん、いーっぱい楽しもうね！！』

車に乗りながら美咲は笑顔で言った。

今日も美咲の手にはオレンジジュースが2本あった。オレのと美咲の。オレがこの前好きって言ったからまた買って来たんだなうと思
うと少し笑えた。そんな美咲が可愛かった。

『よし！！海行くか！！ちょっと遠いけど、砂浜のキレイな所に行
こう。』

そう言って車を走らせた。

海までは2時間ぐらいかかった。

島にある砂浜に向かうため何個か橋を渡った。景色が変わる度、美
咲は車の外を眺めながら『スゴイ！！キレイ！！』とはしゃいで
いた。

でも外をみた後はオレの方を向いて『でもタクちゃんをみてる方が
好きー！！』って言うてきた。

オレは照れながら運転をした。

砂浜に着くと一緒に手を繋いで歩いた。潮が引いていたから、ちょ
っと遠くまで行けた。

後ろを振り返るとオレと美咲の足跡がずっと続いていた。同じ歩幅
で、小さな足跡と大きな足跡がついていた。

『タクちゃん…こうやってずっとタクちゃんと一緒に歩いて行けた
らいいな。』

美咲が立ち止まり真面目な顔で言った。ちょっと悲しくも見えた。

『うん…一緒に歩いて行けたらいいな…』

オレは美咲と繋いでいる手に力が入った。けど、それ以上は何も言えなかった。

オレも心の中では決めていた。

…ずっと美咲と一緒にいたい…
って。

美咲は1ヶ月の約束を今も信じて、受け入れようと必死のようだった。

『あ…ごめん!!ごめん!!』

せつかくキレイな海をみに来たのに、こんな話したらダメだね!
!美咲、今とっても幸せだよ!!ありがとう!!』

美咲はそう言うとその場にしゃがんだ。そして砂浜にハートをいっぱい描きだした。

『これがタクちゃんへの想いだよー!!!!いっぱいあるでしょー!!』

笑顔でそう言うオレの方を見た。

美咲の好きだという気持ちはすぐ伝わった。

そして美咲はデジカメを取り出して、一緒に写真を撮ろうと言い出した。

手を繋いでいる写真や、砂浜、海、美咲が描いたハート…美咲はいっぱい撮っていた。

しばらく遊んで、近くのレストランで食事をして帰った。

帰りの車の中では来週のユニバの話で盛り上がった。

『ユニバ楽しみー！！美咲、乗りたいものがいっぱいあるから迷っ
っちゃうー！！』

美咲はずっと楽しみにしていたのか、手と足をバタバタとさせながら喜んでいた。

『うん。オレも楽しみ！』

本を買って一緒に見よう？また平日の夜空けるからご飯でも食べながら！』

『本当ー？？うんうん！！ありがとう。平日もまた会えるの？幸せ
ー！！』

美咲は興奮しながら言ってきた。

『いいよ。じゃあ、木曜日辺りでも大丈夫？本買つとくから！』

オレも美咲に会えるのが楽しみだった。

『やったあー！！楽しみがまた一つ増えたあ！！』

あつ…でも本は美咲が買ってもいい？早く見たいからっ！』

『イイよ！じゃあ、どこ行きたいか見といてなー！！』

美咲はずっとオレの方を向きながら話している。ずっと笑顔で、ずっと嬉しそうに。オレは運転しながらも美咲の方をチラチラ見ていた。目が合う度、

美咲は『やっぱりタクちゃんカッコイイ！！タクちゃんの笑顔大好きだよ！』と言っていた。

美咲の笑顔の方がずっと可愛くてオレは大好きなのに、恥ずかしくてなかなか言えなかった。

行よりも帰りの方がずっと早くて、気が付けばいつものコンビニに着いた。

『今日も楽しかったな。また来週も楽しもうな！！』

オレは美咲の頭を撫でながら言った。

『うん！！来週…最後のデート…楽しもうね！！』

美咲の声が小さくなった。美咲の目には涙が溜まっていた。笑顔に振舞っているが、瞬きをしたら涙が流れそうだった。

『そんな最後って言うなよ。もう一生会えないってわけじゃないんだし！深く考えるな。…な？わかった？』

美咲を抱き寄せた。

『うん…』

オレの胸の中で美咲はうなずいた。

オレは美咲の涙を…初めて見た。

しばらくして美咲は顔をあげた。必死で笑顔を作ってる美咲がいた。オレはそつと美咲にキスをした。

『美咲には笑顔が1番似合う』そう言つと美咲は『もう！！バカ！』と言つて笑つていた。

しばらく話しをして、今日は疲れたから早めに解散する事にした。

『じゃあ、またね！！ありがとう。タクちゃん。』

美咲はそつと車から降りた。

そして家に向かつて歩いて帰つていった。

月曜日。

祝日なのにやっぱり仕事が入って、オレはいつものように支度をしている。今までは彼女がいなかったから祝日出勤でも全然構わなかったが、今は美咲と一緒にいたいと思った。

そんな事を考えながらいつもの時間に家を出て、職場に向かった。途中、ケータイが光った。美咲からのメールだ。

『おはよう！祝日なのにお仕事エライね！！さすがタクちゃん！！次あった時はいいっぱい褒めてあげるね。だからお仕事頑張つてね！！タクちゃん大好きだよ！』

オレはいつもこのメールで元気をもらう。美咲からのメールは自然と笑顔になった。

…よし。頑張るか！…

そう自分に言い聞かせて今日も仕事を頑張った。

涙

次の日も朝からメールが届いた。

《タクちゃん、おはよう！美咲も今日からまた学校だあ…でも今週は3日行ったらお休みだから頑張るねー！！それに今週はユニバだしっ！！タクちゃんもお仕事頑張ってね！！世界で1番好きだよー！！》

美咲からの可愛いメールだった。

《おう。頑張る！美咲もしっかり勉強頑張れよ！！》

久しぶりにメールを返してオレは仕事に行った。

仕事中也メールはたくさん届いた。その中に《今日は本を買いに行ってくるね》と書いてあった。

…オレもそろそろ調べないとな…ふと、ユニバの事が頭に浮かんだ。明後日また美咲に会うからその時までにはチケットを取って新幹線の予約もしようと思った。

夕方になって、今日の仕事はいつもより早めに終わった。また美咲からのメールはいっぱい溜まっていた。

《今ね、本屋だよー！どれにしようか迷うなあー！！めっちゃ楽しみっ！！早く帰って読みたいなあー！！》

タクちゃん、今日もお仕事お疲れ様でした。いい子いい子。また夜に電話しようね!!」

メールを見ながらオレは家に帰った。

家に着くと風呂に入ってご飯を食べて、ソファでゴロゴロしながらパソコンをつついた。いろいろ調べているとあつという間に時間がたつて、気が付いたらいつも美咲と電話をする時間を過ぎていた。

オレは慌ててケータイを見た。いつもならメールが来てるはずなのに、美咲からのメールは1通も無かった。

…本でも夢中で読んでいるのか？美咲は子どもだからな。…
そう思いながら電話をかけてみた。

…プルル…プルル…プルル…

繋がらない。

…風呂でも入っているのか？…

《おい。何かあった？電話に出ないから心配なんだけど。時間が空いてら連絡してな。》

オレはメールを送ってみた。

しかし、しばらくしても美咲からは何の連絡もなかった。

…寝てるのかなあ…
オレがパソコンに夢中になっていたせいだと思った。

何度か電話を掛けてみたが繋がらず、結局美咲からの連絡も来なかった。

朝になったが、美咲からの連絡が無かったことが気になってあまり寝れなかった。

オレはいつものように仕事の支度をして、家を出た。

職場に着いて車の中で美咲からのメールを待ったが来なかった。時間ギリギリまでケータイを見ていたけど、ケータイがピンクに光ることはなかった。

…やっぱり変だ。美咲からメールが来なかった事はない。…

《おはよう！！美咲？何かあった？
仕事行ってくるな！美咲も勉強頑張れよ！》
オレはそう送って仕事に行った。

昼休憩になって、すぐにケータイを手に取った。メールは1通も届いていない。

…メールが来ないって淋しいな。美咲もオレがメール送らないから淋しかったのかな？もしかしてオレに意地悪でもしてるのか？…

いろいろ考えた。

今日の仕事も終わり、結局美咲からのメールは全くなかった。さすがに心配になってすぐに電話をした。

…プルル…プルル…プルル…

繋がらない。オレは不安になって何度も連絡をした。

…プルル…プルル…

『…はい。』

電話が繋がったかと思うと、男の声がした。

『え…??誰??このケータイは美咲のだよな??』

よく分からないが電話に出たのは美咲じゃない事だけは分かった。

『そうだよ。これは美咲のケータイだよ。』

男が応えた。一瞬、美咲の元カレが出たのかと思ってびっくりした。

『え???誰お前???美咲に代わってくれ。』

『…』

何も応えなかった。

『おい！聞こえてる？ちょっと美咲に変わってくれ。』
オレは少し強い口調で言った。

『姉ちゃんはもう電話に出れない。』

…姉ちゃん？？あつ…美咲の弟？…

前に美咲の家族の話をした時に、弟がいると言っていた事を思い出した。

『え？？何で？？』

何で弟が電話を取っているのか分からなかった。

しばらく沈黙が続き、電話の向こうで弟が泣いているのが聞こえた。

『姉ちゃんは…』

昨日…

交通事故で死んだから…

もう電話に出る事が出来ない…』

オレは理解するのに時間がかかった。

『え??美咲が??交通事故…??』

嘘だろうと思ったが、身体が固まって動かなかった。

『いつ?どこで?』

オレはいろんな事が聞きたかった。

『昨日…本屋に行った帰りだったらしい…詳しい事はまだ聞けてないけど…病気に運ばれた時には…もう…息をしてなかったみたいで…』

弟は泣きながらいろいろ教えてくれた。

…嘘だ…そんな事はない…美咲が死んだ??…

『え…?』

オレの頭の中は真っ白になった。

昨日までワイワイ話していたのに。昨日まであんなに笑顔でい

たのに。昨日までいっぱいメール来てたのに。昨日まで…

それ以上何を話したか覚えていない。

電話を切った後も、その場から動けなかった。

どれくらい時間がたったのか分からないが、オレはまだ車の中にいた。

ケータイを手にすると、また美咲からメールが届くんじゃないかって何度もセンターに問い合わせをした。もう二度と来る事はないのに…

オレは初めて美咲からのメールを読み返した。毎日欠かさず送って来たメールは受信フォルダがいっぱいになるほどあった。当たり前だと思っていたメールは、どれも優しくて美咲らしいメールばかりだった。オレを元気にさせてくれたり、笑わせてくれたり、励ましてくれるメールばかりだった。

そしていつも最後に“タクちゃん大好きだよ”って言葉が書かれてあった。

…オレはまだ大好きだよって言ってないのに…美咲にオレの気持ち

を伝えてないのに…

そう思うと涙が出て来た。
涙が止まらなかった。

初めて声を出して大泣きをした。

…あれ程楽しみにしてたユニバ、一緒に行くんじゃないのかよ
…オレ、約束終わったなら美咲の事本気で好きになったから告白する
つもりだったんだぞ…もう出来ないじゃん…

今の現実と信じたくない気持ちがオレの中で葛藤していた。

オレは今の状況を嘘だと信じ込ませ、
家に向かって車を走らせることにした。でも、それもすぐにその思
いは解かれ涙が溢れてきた。

やっと家に着いたが何もする気にもなれず、ただまた美咲から連絡
が来るんじゃないかって待っていた。
いつものソファで、いつものように横になっていたら、またかか
ってくるんじゃないかって…

紙袋

結局一睡も出来ないまま朝がきた。

仕事には行けそうもないと思い、会社で電話をした。

『すみません…体調が悪くて…今日は欠勤でお願いします…』

はい…すみません…お願いします。』

オレは初めて仕事を休んだ。会社の人には淡々と応対されて電話を切られた。何気ない日常の様に。今のオレには不思議でたまらなかった。

ずっとつけていたテレビのニュースでは、事故の事がしていた。いろんなニュースの中に紛れて、一瞬だけその事に触れられていた。

時間が経つに連れ、オレの頭の中も整理が出来てきた。ただ信じたくないだけで。

ふと見た着信履歴も美咲でいっぱいだった。

このボタンを押したらもう一度美咲の声が聞けるんじゃないかって…美咲に繋がるんじゃないかって…そう思った。

オレは戻るなら戻りたいと何度も願った。

前に美咲に言っていた願いが一つ叶うなら、美咲を生き返らせてほしいと何度も何度も願った。子ども騙しかも知れないけど、オレには嘘であってほしいとしか考えられなかった。

時間ばかりが過ぎ、もう夜になっていた。何もする気になれず、心が空っぽになっていた。

あまり眠れないまま、オレはソファアの上で横になっていた。カーテンの隙間からは日が差していて、朝になった事が分かった。

家にいても考える事は美咲の事ばかり…

今日は仕事に行く事にした。

仕事に打ち込むと一瞬でも忘れられるかと思い、支度をして家を出た。

1人でいるのが怖くて会社に行くすぐに車から降りて工場の中に入った。工場の中には数人が雑談をしていた。

同僚に 昨日休んだ事を聞かれたが、体調が悪かったただけと言うとそれ以上は聞いて来なかった。オレの顔色が悪かったから本当だと思っただろう。

仕事が始まり、指示された仕事はこなせたが、空いた時間や休憩の時間は美咲の事を思い出してしまい目頭が熱くなった。

やつとのおもいで仕事は終わった。いや…終わらせた。正直、あまり寝ていないし今日の仕事は精神的にも肉体的にもキツかった。

オレは、すぐに車に乗った。

もう元気が出るメールも届かないと思うと、ため息が出た。オレは
仕事中、ケータイはあまり見ない様にしていた。

家までは何とか帰れた。家に着くと、ソファーに倒れ込んだがポケ
ットの中身が邪魔をして、身体が少し痛かった。

中にはケータイがあった。ケータイをテーブルに置こうとした時、
光っている事に気付いた。

…着信1件…

急いでケータイを開いた。

…美咲…

美咲から着信がきていた。オレはソファーから飛び起きて、慌てて
掛け直した。

…やっぱり嘘だったんだ。良かった。また美咲の声が聞ける。
…そんな期待をした。

プルル…プルル…

『…』

『もしもし？美咲？？生きてるの？？びっくりさせんなよ！』

『…』

『美咲？…もしもし？』

『ごめんなさい…僕です。』

今日、姉ちゃんの葬式が終わりました…』

電話に出たのは弟だった。

『え…？』

また現実引き戻された。やっぱり本当だった。

『あの日に持っていたカバンの中からノートが出てきて…
きつと姉ちゃんの彼氏に宛てた手紙が…挟まっていたんです…』

『…』

オレは言葉が出なかった。

『渡したいのですが、ダメですか？』

『…え？オレ宛て…？』

うん…

わかった。取りに行く。』

一瞬、どうしようか迷ったが、美咲がオレに宛ててくれた手紙を取りに行く事にした。いつもの場所まで。いつも美咲が手を振って待っていてくれるコンビニまで。

時間は9時を回っていた。

色んな事を考えオレは運転をした。ついこの前までは美咲をどこに連れて行ってやろうかと考えながら走っていた道が、今は長く遠く感じた。

コンビニに着くと男が1人、コンビニの前に立っていた。小さな紙袋を持っている。

オレは車を停めて、男の所に歩いて行った。

『あの…』

オレは男を見ながらゆっくり話しかけた。

『はい。美咲の弟です。』

男の顔には笑顔は無く、すごく疲れた顔をしていた。

『これ、姉ちゃんの…渡したかったものだと思うので…』

そう言うと、袋を差し出された。

オレは美咲の弟の目を見ながら受け取った。弟は美咲と同じ優しい目をしていた。

オレが受け取るのと同時に、じゃあ…と美咲の弟はオレの前から立ち去ろうと歩き出した。弟も突然の出来事で気持ちの整理が出来ていない様だった。オレと同じ…いや、オレ以上に辛い思いをしていると分かった。

『ちょっと待って。』

…わざわざありがとう。』

オレは何も言葉が浮かんで来なかった。でも、わざわざ届けてくれた事に感謝をした。また少しでも美咲を感じる事が出来るなら、オレは幸せだった。

一瞬、弟の足は止まったが、また歩いて帰って行った。

オレは美咲の弟が見えなくなるまでずっと小さくなっていく背中を見ていた。美咲がいつも帰るときみたいに。

車に乗り込むと、少し紙袋の中身が気になったが先に家に帰る事にした。正直、開けるのが怖かった。美咲からの最後のメッセージだと思うとなかなか開けられず、紙袋を抱えたまま車を走らせた。

家に着くと、紙袋をテーブルの上に置きしばらくそれを眺めていた。いろんな事がオレの頭の中に浮かんできた。そのどれもが美咲への想いだった。

オレはふーっと深い溜め息をして紙袋を手を取った。中を覗くと手のひらサイズの小さなノートと手紙が入ってあった。

ノートはパラパラとめくると、まるでアルバムかの様にオレとデートに行った写真がいっぱい貼られてあって、その一つ一つに美咲らしい可愛い字でコメントが書かれてあった。

車の中の写真や、水族館、動物園の写真、この前行った海の写真までいっぱい貼ってあった。そのほとんどは笑顔のオレが写っていた。

“ジャーン！！美咲の大好きな彼氏！！”

“このタクちゃんが大好きー！！”

“ずーっとこの手が離れないとイイなあー！！”

“ 初ツーショット写真！！タクちゃんカッコ良い！！ ”

そんなコメントがいっぱい書かれてあった。

途中には日記みたいなものが書いてあって、読んでいると美咲が近くにいるみたいで涙が溢れてきた。

オレとのデートがどれほど楽しくて、また、次のデートもどれだけ楽しみにしていたかが美咲なりの言葉で書かれてあった。

オレはゆっくり時間をかけて1ページずつ読んでいった。

もう一つ袋に入っていた手紙は“ タクちゃんへ ”と書いてあって、封筒は中身がいっぱい詰まっているのか少し分厚くノリでしっかりと止められてあった。美咲の家族も開けていないようだった。

オレは手紙を手を取ったが、開けるのはまた今度にして、ソファに倒れこんだ。これを開けてしまったら本当に最後のような気がして怖かった。

昨日よりも気持ちは軽くなったような気がしたが、やっぱり涙は自然に溢れてきた。

オレは気がついたら眠っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1418y/>

約束

2011年11月29日22時47分発行